

編集後記

医療全体に止まらず社会全体を日本の悲観主義が淀みなく覆っている。わが消化器外科学もご多分に漏れず払拭しきれないモヤの中にあり、かつてみられた広範な貢献という勢いを外に見せつけることが出来ていぬところがある。このような背景が作用しているためであろうか、投稿されてくる論文には興味深い内容であるにもかかわらずその完成度については首を傾げたくなることもある。もちろん、しっかりと完成させた論文も少なくないが、高い完成度を目指しての努力を払ったのであろうか、指導者は徹して眼を通したのであろうか、と問いかけたくなるものも少なくない。和文論文が評価されていないという風潮もあってか、いわゆる“厳しく”論文指導される、あるいは指導する事の関係がしっかりしていないためとも推定される。さて本号掲載論文中には、今日的常識の中で収まった形の範囲で受理されたものも少なくない。さらなる分析・解析の仕方によっては後世での新展開に貢献しそうな報告もみられるのだが、追求が若干甘い感のあるものも存在する。今日では、遺伝子学、分子生物学なる学問が病棟や手術室のあちこちに内在していることを是非知っていただきたい。わずかな症例数であっても正確に生体材料の保存をできるならば、多くの限界を凌駕できることもある。そのためのシステム作りには特異なりセプターを求めようとする一個のリガンドのように、若い人が持ち合わせている情報を積極的に上司へ伝達しようとする努力をすべきであろう。幸いにも今のリーダー世代には無駄の中に多くの大切なものが存在していることを知っておられる人が多い。必ずや若い人へ貢献するはずである。

さてかつて私共が医学の進歩のためにあるいは患者さんのためにと信じて実施してきた医療行為の中のいくつか、今日では否定される行為として位置付けられているものがある。今日の政策的な意味合いからの圧力に主因のあることも否めず、その矛盾を強く感じている人も少なくないであろう。そこで、われわれとしては、どうすべきであろうか。戦う2チーム間にサッカーボールが投げられた時は、われわれとしては少なくともキックをし、走りまくる選手として参加すべきであろう。ダーウィンの「種の起源」に述べられている有名な言葉“ It is not the strongest of the species that survives, not the most intelligent, but the one most responsive to change.”を想い浮かべていただきたい。夢とは申さずともビジョンを抱かずして発展などありえないことを伝えているかのようだ。宣誓のみをするとか三日坊主の行為に止まるということではなく、何かを成就・成功させようとする努力とその継続性の重要性を示唆している一文とも言えよう。かの田中耕一氏の語録にも同じことが言われている。「失敗した。幸運にも……」根気よくコツコツやるのが一番！」と。執筆にも査読にも光るものを引き出そうとする努力を払うことによって本邦の消化器外科学の発展に少しでも貢献して行こうではありませんか！

(平田 公一)